

日本現代文學全集
81

阿部知二
中山義秀
集

講談社

日本現代文學全集

81

阿部知二・中山義秀集

編 集

伊 藤 整
龜井勝一郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉

初版 第1刷

昭和42年6月19日

増補改訂版 第1刷

昭和55年5月26日

著 者 阿 部 知 二
中 山 義 秀

装 幀 蟹 江 征 治

發 行 者 野 間 省 一

發 行 所 株式會社 講 談 社

印 刷 有限會社小笠原印刷所
製 本 株式會社若林製本工場

東京都文京區音羽 2-12-21

郵便番 號 112

電話東京03 (945) 1111(大代表)

振 替 東 京 8-3930

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

Printed in Japan

0395-106817-2253 (1)

(文1)

阿部知二集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

日獨對抗競技……………五

冬の宿……………二

黒い影……………九

思 出……………二四

人工庭園……………二四

主知的文學論の序……………二六

絶望の泉……………二七

抒情と表現……………二七

震教徒の村……………二八

藝術と社會……………二八

私の一冊の本……………二八

作品解説……………瀬沼茂樹 三九

阿部知二入門……………高田瑞穂 四六

年 譜……………四三

参考文献……………四九

中山義秀集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

厚物咲……………一五

碑……………二六

テニヤンの末日……………三三

少年死刑囚……………三六

黎明……………四四

故里の土……………五〇

關東狂少年……………五〇

咲庵……………三三

私の文壇風月抄……………五〇

作品解説……………瀬沼茂樹四三

中山義秀入門……………高田瑞穂二〇

年 譜……………四一

参考文献……………四〇

阿部知二集

山 な あ 月

は が を の

ら る け ぼ

を 、 そ

ひ 霧 る 河

た 雲 ら 顔

に ば り し 知 二

日獨對抗競技

九月。シベリアは灰色に冷却した。東に向ふ列車のなかにヨロッパ、アメリカ、日本の觀光客、利權屋、學者、ソヴィエットの士官、——その外に、二人の監督に率ゐられた十數人のドイツのスポーツマンも居た。一九二九年に入つて、英國、佛蘭西、スイスを敗つた彼等は、嚴肅な訓練的生活によつて長途の惡コンディションと戦ひながら、東京を指してゐた。

列車は露支交戦地帯を避けて、チタから黒龍江に沿つて迂回した。ある日、白樺と落葉松の森林のなかを走つてゐた。食堂のなかで、小さな日本人の老紳士がスポーツマンたちと隣あはせた。ワイツェル監督が、彼の膝のドイツ新聞の片隅を覗いた。「一寸つとおみせ下さい。」「どうぞ。」老紳士の巨大な灰色の髭が廢ねかへつた。頓狂な學生選手、エルドラヘルが噴き出す。笑の聲の主を探さうとした老紳士の視線はそのとき、壓倒するやうに太く赭い頸と、盛上つた肩と胸をもつた肉體に衝きあたつた。——老紳士は首をすくめて新聞紙のかげに隠れた。

十月五日。東京。赤坂離宮裏の森林公園のやうな坂道を無數の自動車が皆一つの方向へ走つてゐた。流れのなかのある車體内に、法學博士、S教授夫人は瞬間ためらつた。これらはみな、競技場に走るのだ。そして彼女もまた——彼女は何故に行くのか？ 嚴格な家庭と教養、嚴格な學者の夫人、——彼女はあらゆる東京の娛樂を蔑

視してゐたはずだ。あらゆるスポーツについて、そんなことを考へたこともないはずだ。彼女は自ら驚愕する。昏が微かに慄へる。(ストップ)といふつもりだつたかもしれない。運轉手の頸が少し傾いた。だが、この無數の車體の流れは、一定の意志をもつやうに、刻々に競技場に注ぐ。

——その入口に、博士の甥、柴田がステッキをいぢりながら、薄い口髭をふるはしながら待つてゐるだらう。彼女は再び動搖する。——はじめて彼の勸誘に應じたのだ。彼女の夫の洋行したあひだ、絶え間のなかつた柴田の求愛に對して、それを滑稽以上に考へたことがあつたらうか？ それなのに今、博士が歸つてから、彼の誘惑に負けようとするのだらうか？ (たうとう來ましたね。) さう言つて柴田はその白く美しい頬に勝ちほこつた微笑をただよはせるだらう。大きな恥辱だ。

だが、もはや、樹木の上に、競技場の尖塔と日章旗が薄い日に輝いてゐた。

柴田は彼女を小腋に抱くやうにして、スタンドの階段を昇る。彼女は大斜面からの無數の視線を顔面に感じて火のやうにあかくなる。競技開始を待ちわびた群集はあらゆるものにはげしい好奇心を集注するのだ。彼女はいく度も階段によるめく。柴田がやはらかにその肉體を支へながらささやく。「——席を隅の方に取つて置いたのですから。」

赤いオオバアを着た娘を中心にした數人のドイツ人の後に、彼等が坐つた刹那「君が代」が響いた。皇族たちの入場。起立した人々は互の肩と肩を割つて貴賓席に視線を注ぐ。——やがてそれに倦きると、空虚な巨大な楕圓形のフィールドと、トラックの白い線が無目的に凝視する。

行進曲。二時四十分。左方から黒褐色の馬のやうな三十人の日本選手が小野の持つ日章旗を先頭にして入場する。右方から十五人の

ドイツ選手。金髪、ユニフォームの胸の眞紅な線、黒鷲、そして眞白で長く垂直の脚の羅列。彼女はこのやうに生々しく美しい感覺を味はつたことがない。

K殿下、フォレット大使、O侯爵の祝辭。ウィッヒマンと織田の宣誓。ベナント交換。いく度とない「君が代」^{ドイッヒマン}「獨逸國歌」——だが、彼女は全くそれらに無感覺だ。彼女はドイツ選手の先頭に、ヒンデンブルグ大統領を引く黒布をつけた三色旗を捧げた巨漢をみる。驚くべき肉體の塊。(プログラム) 投擲選手エミル・ヒルシエフェルト。東プロシア軍團軍曹。砲丸投世界記録保持。——まもなく彼女はさらに熱心に列の中央の一人のアスリートの美しい肉體をみつめる。鶯色の髪、少年のやうな顔、日にやけたブロンドの皮膚。しなやかで圓く弾力に富んだ脚。(プログラム) クルト・ワイス。理科學生。二十三歳。十種競技選手。——彼女はすべてを忘れる。今、その眼の奥に、T港の朝の青い浪が搖れはじめた。検査を終つたA丸が岸壁に着く。下船する人々を取巻く渦巻の中に、彼女の夫の猫背と髭が揉まれてゐる。彼女は近づかうとする。群衆の波が彼女を渦巻の中心に押した。一群の青年を取巻いたカメラマンの照準の中に入つてゐた。彼女はよろめく。巨大な岩のやうな肉體に衝き當る。彼女は倒れようとする。——突然、大きな手がしつかりと彼女の右腕を握み、しづかにその混亂のなかから救ひ出してくれた。日にやけた少年のやうな顔、強健でやはらかな握力の感覺。

——それはワイスだ。そして、彼女がよろめいた肉體の壁は、今、旗をささげるあから顔の軍曹だ。

「……ドイチュラント、ドイチュラント、イイバアアレス、イイバアアレス……」ドイツ人の群は小聲でうたつてゐた。フィイルドの一隅に今國歌とともに三色旗が昇つてゆく。柴田は口笛でかくく和してゐる。「イイバアアレス、インデル、ヴェエルト」柴田の誘惑？ 柴田の勝利？ 彼女は今冷笑する。——彼女はいま此處に來

た理由を知つた。そして苦痛に似た戰慄を全身に感じた。

百十米高障礙開始。行進曲。しばらく熱狂をおさへられた群衆の急速な騒音。トロスバッハの數回にわたるフライングスタート。何回目かのビストル。「トロスバッハ」^{ドイッヒマン}「ドイツ人たちが叫喚する。彼女の前を瞬間、電光のやうに通過した日本とドイツの四つの肉體の中に、飛躍するワイスの姿體を彼女はその網膜にさめた。トロスバッハの體勢がいくつ目かのヘアドルで崩れた。三木の速力。ワイスはその間をぐり抜けた。1、三木、十五秒一(日本新記録) 2、ワイス。3、島。4、トロスバッハ。得點、日本七點。ドイツ四點。

二百米のビストル。彼女はもはやあらゆるものを忘却した。ただ激しく小刻みな戰慄がその兩膝にあつた。——馬のやうな山陰の青年吉岡のスタート・ダッシュ。エルドラヘルの短い胴。純白な長い脚。彼は魚のやうに滑つてタイプを切る。——「砲丸投です。よ。ごらんなさい。」柴田が乳白色に塗られたオペラ・グラスを渡す。高田と齋藤の引緊まつた黒色の肉。だが、白い丘陵のやうに盛上つたヒルシエフェルトの肩の筋肉が蠢動するたびに薄い日光に光つた。だが、それよりも滑かで美しいリズムで波打つワイスの筋肉があつた。彼女は今男性の肉體が何のために存在し、何を意味してゐるかを感した。鉛色に底光る砲丸が、その長く白い腕の伸びるたびに低くブツシされて飛ぶ。彼女はそれが砂の上に落ちる重壓と音響を彼女の胸の波立ちの上に感じた。白く細い指がオペラ・グラスにからみついて離れない。

棒高飛。三米六〇。ケッヘルマン失格。三米八五。織田失格。三米九〇。西田が鳥類のやうに體をゆらめかして飛びこえた。ウェグナアは二回失敗する。ユニフォームを脱いでパンツだけになつた。群衆が笑ひやめない。泥のついた白く廣い胸だ。彼女の前の美しい令嬢のオペラ・グラスがそれに固定してゐた。空中に倒になつた白人

種の裸身。彼女は博士がスウツケイスの中から取出して或時示したドイツの男女の奇怪な裸身の繪を感じた。——急いで彼女が持つてゐたグラスを柴田に返さうとした。「いや、僕はいりません。どうぞ。」（この男は、女の感情をすべて知つてゐて、それを弄ばうと考へてゐるのだ。）彼女は反撥して眼にあてた。競技場の上に搖れてゐる樹木の梢と、その上を流れるゆるやかな雲の流れが、グラスの中に移動して行つた。

「むかうの招待席から、M博士が此方の方をみてゐます。ちつとも氣が附かないやうですが——。」

彼女は首を傾めた。フロックコオトに包まれた、肥満したM博士が、退屈してしまつたやうに、欠伸しながらきよきよと群集を見廻してゐた。彼女の夫の同僚。國粹主義大學教授。

「どうしてあのかたが、」

「あの先生は、あなたの博士より賢いらしいですよ。このスポオツつてもこの意味が判つてゐるらしいんですよ。たとへば——このヒルシェフエルトは模範軍人でヒンデンブルグに表彰された、と書いてありますね。つまりスポオツマンは支配階級の護衛兵なんです。——それから、ほら、向うからやかましい聲がするでせう。野球場で二三萬の人が夢中になつてゐるんです。此處と合せて五萬人とすれば、東京の四十分の一の人が、何も彼も忘れてしまつてゐるんです。つまり酔拂つてゐるんですね。おたがひにもね、いろんな意味で。」

ドクトル・ベルツァの機械人形のやうに規律の正しいストライドとピッチが、八百米第二周で刻一刻日本選手を引離してゐる。彼はヌルミをも破つたのだ。中距離王國ドイツ。

「——といったやうなことを、僕は最近きかされたんですよ。マル・シズムの好きな令嬢につきあつてもんだから。モスクワにはスパルタクシアアだつてものが有るんですよ。プロレタリアのオリ

ンピックなんぞでせう。——いろいろ僕はその人にききましたよ。感心なものだ。」

彼女はこの皮肉な不良青年紳士の美しい横顔を憎んだ。（勝手にしやべるがいい。氣を引くためにしやべつてゐるならそれもいいだらう。）——タイプを切つたベルツァはドイツ少女の花束に接吻してゐる。

「そこで——僕も考へてみると、どうもあのM博士は伯父さんより頭がいいやうだ。このスポオツを自分の興味なんか抜きにして利用するのがいいと考へたんでせう。實際、伯父さんなんて、僕は聞いたんですが、折角ドイツ選手と一緒にシベリアを旅行しながら、（感ずべきドイツ復興精神）といつたやうな材料にでもなりさうなものだ。たうとう一言も話もしないで歸つて來たんですよ。本ばかり讀んでもだめですよ。もつともあの人もどうせ僕の親父の弟なんだから頭は悪いにきまつてはゐるが。」

細く、百合の花のやうに蒼白なデイクマンが、無感激に五千メートルの第何周かを、強健なストライドの北本を追つてゐたが、差は容易に縮まらなかつた。そして、五千米は日本全勝、日獨は同點となつた。薄暮の中に、スウェデン・リレーが行はれる。百、二百、三百、四百。豫定のごとく日本がやぶれた。再びドイツ國歌。三色旗が空に登る。群集が鳥の群のやうに騒ぎ雪崩た。競技場の内も外も全く暗かつた。

「ホテルで、——夕めしをたべませんか？」柴田がタキシを見付けた。

「ひとりであつしやい。」彼女は別の車を呼んで扉を開いた。柴田は薄い口髭を曲げて笑ひながらお辭儀して去る。小聲で唄をうたつてゐる。——「ハレルウヤ・バム、ハレルウヤ・バム……」

埃を交へた黄白色にみえる夜霧がアスファルトの道のうへをすべり、樹木と人々を濡らしてゐた。彼女は固く眼をとちながら、灯のついた街を走つた。新しくふしぎな感情に疲勞してしまつた彼女の

さまざまの意識が羊毛のやうに眞白になつて堆積してゐた。

家のなかに、彼女の小さな娘がピアノをたたき、博士は咳しながら著述してゐた。彼女は應接室に入つて、博士から命ぜられたかれらの郷里の森林賣却の書類を調査する。十數年のあひだ、彼女は一日も休むことなしに、夫の權勢と財産のために事務に仕事した。それから、彼女の屬するある婦人會のために數理的報告書を作らなければならぬ。――疲勞して見上げた。パンテオンのジュピタの彫刻の寫眞が、彼女に向つて、いまその筋肉の光と匂をよみがへらせながら、巨大な砲丸を投げつけようとした。

第二日競技が開始されようとしてゐた。眼立たない着物をきた彼女は、芝生席の一隅に、學生の市民のかげに坐つた。M博士の視線を恐れ、柴田を嫌つたのだ。古びたオペラ・グラスをあててメインスタンドをながめた。誰も彼女の存在には氣が付かないだらう。だが、ここからM博士も見えた。貴賓席の突出しのかげに隠れた柴田の半身もみえた。その隣りの、きのふ彼女が坐つたところに、蒼い服をきた娘がゐた。マルキシズムの好きな令嬢？ 彼女の口に冷笑がうかぶ。

百米。ふたたびエルドラヘルのダッシ。南部を一米引離した彼の胸の黒鷲の頭がタイプを切る。十秒六。

走高跳。一米八八以上。ラテデウイヒと小野が各々の記録を自らやぶりながら争つたとき、群衆の愛國的興奮が波立つた。傍のサラリマンがあらゆる罵聲をドイツ選手に投げつけた。彼女はきのふの柴田の言葉をおもひ出した。だが、彼自身はあらゆるこの興奮の中に、取残されたやうに冷然と、これらのすべてのスポーツをただ感覺的なパノラマとしてみてゐるだらう。病的な知的な幻想をスタジアムのなかで弄んでゐるだらう。――しかし、今一人、この熱狂にとりのこされたものがあるのだ。彼女自身だ。

そして、今、圓盤投が彼女に最も近い位置に開始されたとき、彼女はあらかじめ感知されてゐた罪惡を意識した。再びヒルシェフルトの肉體。肩――胸鎖乳頭筋、潤頸筋、三角筋、大胸筋、僧房筋。下肢。――四頭股筋群。腓腸筋、下腿伸筋群、大腿屈筋群。あらゆるものが爆發する前のやうに蠢動する。だが、ワイスのしなやかな肉體の回轉は、どんな舞踏よりも美しい。そしていま彼女は彼の腕から、晴れた日の風の中を光りながらデスカスが離れるとき、彼の額に散りかかる栗色の髪の色がみえるほど眞近にゐた。ヒルシェフルトは遂に失敗した。日本の新記録を作つて勝つ。三度日獨が同點となる。だが、彼女と群衆の軍國的騒音のあひだには何の關係もない。

「四百米」「走幅跳」「千五百米」そして最後の八百米リレイにはワイスが出るであらう。しかし、彼女はこのすべてを残して歸らなければならぬ。滑りやすい芝生の傾斜面をよろめいて外に出た。野球場とトラックの二個所からの叫聲が、外苑の樹林のうへにもつれあつて、巨大の笑聲のやうにひびきわたつてゐた。耳を蓋ふやうにして靜かに市街にのがれる。すべての興奮を忘れようとする。しかし彼女のからだは小刻みにふるへてゐた。

衣服をかへ、嚴肅で高雅な貴夫人となつてT會館に入つてゆく。彼女の仲間である、古くあるひは若い夫人たちがもはや食卓についてゐた。貴族、政治家、商人、軍人の妻たち、彼女の隣のある子爵の夫人が酒をすすめる。新鮮な果實の匂ひのする、冷酒が彼女の感覺に點火した。前の薔薇と百合の花が今までの數千倍の明るさになつて輝きはじめた。昨日からのさまざまの肉體の映像が、それに反射した。彼女は煙草を吸つた。

食後「協議」がある。彼女たちは、その夫たちの「活動」の模倣遊戲をしてゐるのだ。猿のやうに巧にそれぞれの夫の模倣となつて、小さな學校の設立について討議した。彼女は、しかし最も綿密

に數字的調査を讀みあげた。そして、誰よりも早くそこを出て行つた。

昇降機に入つた。瞬間眼をとちてしまつた。いま彼女は、數人の快活な日本のスポオツマンに圍まれたまま、その中に交つた一人のドイツ選手の傍にに押しやられた。(此處で慰勞晚餐會が對抗競技のあとに開かれたのだ。)四角に張つた胸の、バトンホルの紅いカーネーションが彼女の額に觸れようとする。眼をひらいてゐる。ワイス。薄いトゥイドの服のなかに、ゆるやかに大きな呼吸のたびに動く新鮮なアスリートの肉體である。——昇降機は落下する。彼女の呼吸がその胸に向つて流れる。ワイスの呼吸が彼女の頭髮のなかを傳ふ。

昇降機が降りた。扉がひらく。「ヘル・ワイス」彼女は口のなかで、あるひは唇の周圍で、かすかな叫びを發したやうに思つた。「ヤア」彼女はそこからだに近く、どこかにそんな聲がきこえたと思つた。他のだれにも聞えないで、エテルの波になつて、ただ彼女だけの聴覺を打つたとおもつた。眼がとちた。彼女は赤い絨氈のうへによろめいてゐた。大理石の床と柱の發した冷氣が彼女をふたたび眼覺ました。何もそこになかつた。彼は行つてしまつた。

翌朝の新聞をみた。七九・五對七一・五。ドイツが勝つてゐた。日本の最後の希望をつないだ八百リレイで、吉岡が一米餘リシュトルツを引離して第二走者にバトンを渡したとき、それは殆んど達せられたやうにも思はれた。しかし、スプリングアでないところのワイスの意外な元氣が大澤を抜き、ドイツの勝利が確實になつた。トロスバッハは語つてゐた。——多く長旅行によつて條件を毀した選手の中に、驚くべき好調を示したワイスの奮闘、それが原因となつてドイツが勝つたのだ。

ポオトフオリオを持つた出校前の博士が部屋に入つて來た。半紙の中に砂をつんでゐた。——「昨日と昨日、お前が何處に行つたかが、これによつてわかる。着物の裾にあつた砂だ。これは地面

か、粗いコンクリートの上に坐つた證據である。勿論日獨對抗競技である。T港でかれらを見て好奇心を持つたのであらうが、それは何といふ恥しいことだ。墮落である。それに、お前が誰と一緒に رفتかともわかる。柴田だ。あれは私にきいた。フリードリヒストラアセ停車場から乗つて歸つたのですか、と。ドイツ選手がそこから乗つたのだ。よほど興味がある證據だ。もし、外のことからきいたのならシュレエジツェル停車場といふ筈だ。大抵の旅客ならシベリア線へはそこから乗る。いや、あれは私が同車してかれらと話しをしなかつたことまできいた。——あのやうなものとあのやうなものを觀るのは、恥だ。國家としての恥だ。——彼女はこんな言葉を聞いたと思つた。沈黙して、彼の著述の草稿を鞆から抜きとり、淨書しはじめた。(M博士の方が彼女の夫より賢いかも知れない。)

「歸つてからもつといふことがある。」彼は大學に向つて出て行つた。

夜。

古いかれらの邸宅の樹木は雨に打たれてゐた。濡れた金木犀の香氣が窓のあひだから滲みわたつて來た。彼女は娘にピアノの教則本を練習してゐた。博士の室は木立のあひだに煙草のけふりに白く光つてみえた。彼を取巻く法科大學生のむれが、その帝國主義の談論にきき入つてゐるのだらう。あるひは、このピアノの音をきいてゐるのだらう。彼女は、高等學校の秀才であつた柴田が、一族の期待を裏切つてあらゆるものを眞面目に解釋することの出来ない知的な不良青年になつた理由を感じた。——娘は、學生たちにきこえるやうにピアノを叩いてゐるらしい。

「ママ、あたしババとキスするのは厭だわ。だつてお髭が痛いんですもの。だからね、こなひだ柴田の兄様にさういつたら、お髭のある方がキスはおいしんですつていつたわ。さうなの。」彼女は娘の愚かさについて何の感じも持たない。博士の髭、柴田の髭、——

それらは下らないものだ。彼女の前に、ワイスのうすく黄金色の髭がうかんだ。

學生たちが去つた。雨の音ばかりだ。だが、今××ホテルで狂燥なジャズが鳴りひびいてゐるのだ。ドイツ選手の東京の最後の夜だ。おそらく夜明けまでこの舞踏會がつづく。ドイツ人の女性たち、あるひは何等かの特權で招かれた日本の女性たち、かれらが、强健な肉體にまづはつてゐるのだ。スポオツマンたちの頑丈な肩に彼女たちの精神と肉體のあらゆる重力を任せその筋肉を電氣のやうに反射し、興奮した呼吸を彼等の胸に、——彼女がしたやうにバトンホオルの花に吐きかけるのだ。ヒルシェフェルト。世界で砲丸を最も遠く投げるところの腕が小さな背中を押してゐる。ドクトル・ベルツァ。彼は機械のやうに正確に旋回してゐるか。ディグマン。彼は蒼白い鳥のやうに旋回してゐるか。エルドラヘル。彼の快活な笑聲がひびく。彼の世界的スピイドはどんなに踊るのであるか。ワイス。彼女の感情が眼にみえない速度でその周圍を回轉する。

(ヘル・ワイス) 彼女は息を怒硝子に吐きつけた。(ヤア) 彼女は暗い外面にそのひびきをきいた。(ヘル・ワイス) (ヤア) だが、——すべてがまもなく地球の半球の彼方に運び去られてしまふのだ。そして、彼女には嚴格な生活がはじまる。博士の葉巻の匂ひの惨み込んだ針金のやうな肉體、柴田の蒼い心理、——彼女はあらゆるものを憎むだらう。

ベルが鳴つた。博士が招いてゐる。彼女はそのとき、彼等の寢室の、ダヴィンチの聖ヨハネの模寫を想ひ起した。それは實はヨハネでなくアドニスである。ワイスであるかもしれない。若く、日に焼けた美青年の裸身の繪である。彼はこの後、夜ごとに彼女を見つめるであらう。奇怪な興奮と羞恥を彼女は感じた。

大阪。京城。最後に奉天に於て日獨支三國の對抗競技が開かれた。ここに注目すべきことは、支那のスポオツマンの擡頭であつた。

た。短距離、その他のいくつかの競技に、かれらはたしかに日本選手を壓倒しようとした。支那人たちの復讐的愛國心がこれほど満足せられたことがないだらう。張學良のあらゆる施設のうち、スポオツ獎勵ほど彼の安全にとつて成功したことはないだらう。ペヘルは張學良に招聘された。ベルツァは日本にしばらくコオチする。モレスとワイスはフリリッピンに招かれた。残つた選手たちは十月の末、ふたたびT港から乗船してシベリアに向つた。

クラスノヤルスク附近の夜。イエニセイ流域の寒氣が列車の中を襲ひ、雪の匂ひが感ぜられた。疲労と懷郷にやや憂鬱になつたスポオツマンたちは皆ねむつてゐた。軍曹ヒルシェフェルトもベッドに入る前、今一枚、シャツを重ねようとして、スウツケイスをひらいた。満洲で、ワイスが彼に託した日本の記念品の包みがころがり出た。(今、かれは暖かい南支那海のうへにゐるだらう。) ヒルシェフェルトはその包装の日本新聞紙を破り、他のケイスに包みかへようとす。ふと、そのふしぎな日本文字のなかにエンゲルハート、ポルツェ、ウィツヒマン、ワイスなどのT港の埠頭の寫眞がみえた。彼はしばらく熟視した。——ウィツヒマンの肩のかげから、黒いキモノを着た日本の婦人の顔がうす白く浮びあがつてゐるのを見る。しかし、もはや紙は半ば引裂かれたまま、遅しい彼の掌のなかにまゐめられてゐる。次の瞬間、それは汚れた床の上に投げ捨てられてゐる。(この巨漢の神經のなかに、このT港の岸壁の、小さな日本の婦人の肖像を片隅にもつ寫眞、それをひそかに保存することが、或ひはクルト・ワイスの意志ではなかつたか、——そのやうな感情は影のやうにも通りすぎなかつたのであらう。) いま、白い花のやうな顔は、軍曹の九〇キログラムの體重をささへる巨大な靴の鉤の眞下に踏みつけられてゐた。

冬の宿

第一章

……私の記憶はみな何かの季節の色に染まつてゐる。それは、映画のフィルムの一齣づつがいろいろな色を持つてゐるやうなものであるが、その記憶のフィルムの色はいつも正確な曆の上の季節と一致してゐるといふわけではない。夏の日の出来ごとが秋の感覺を伴つて想ひ出されることもある。また、ある年の冬ならば冬に、三日續いて起つたことの、はじめの日はほんたうに冬のやうに、次の日は春、その次の日は秋、のことでもあつたやうに錯覺されることもある。これはその事件の性質や、その時の私の心の状態や、その事件に出てくる人物たちの性格容貌などによつてさうなるのだと思つてゐる。

……いま、數年まへに霧島家に寄寓してゐたときのことを想ひ出すと、その秋から春にかけての出来事のすべてが、まつたく初めからをはりまですこしの隙もなく暗く冷却した冬の色に塗られてしまつてゐるのだが、これは、あの一家の生活状態、私のそのころの氣持、すべてが春や夏のやうな空氣の一つも持つてゐなかつたことのためであらう。そのころの私は地方の高等學校から出てきて伯父の家に泊つてゐたが、學校にもあまり出ず、快活に友達とつきあふの

でもなく、まつたく人嫌ひな心持になつてゐた。その時代の風潮として、身に近い友達が争つて社會運動に入つてゆくを見送りながら、心細い氣持で古い外國の文學をばかり讀んでゐた。華美な伯父の家の空氣に反撥しながら、その従妹たちをとりまく娘たちのあれこれに戀愛してみたりやめてみたりしてゐた。そのなかで、庵原はま江といふ音樂の好きな少女が、しばらく心安かつたがそれも夏の避暑地でほかの青年に出逢つてからは私を馬鹿にしはじめたし、友達のたれかれが官憲に逮捕されるといふやうなことがおこつたりしたので、私は一層孤獨な氣持になつてしまつて、どこかの下宿に一人で暮したくなつた。學校にも友人にも伯父の家にもなるべくかけはなれたところに行きたいと思つた。

ほのぼのと明るく暖かい秋の暮のある日に、私は省線のK驛に出入せに降りてそのあたりの家をさがしてみた。線路の内側の高臺には大きな邸宅が杜につつまれた段々になつて連つてゐたから、私を泊めてくれるやうな家はないと思つた。反對の側に出てゆくと、郊外の街道の兩側に小さな貧しさうな店がつづき、町裏の低地には汚れた小工場が立ちならんでゐて、そこにも探すやうな家があるとも思へなかつた。仕方なしに、次の驛まで歩いてゆくことにしてゐると、しばらく泥濘の匂ひの深い、暗い貧民街の家並がつづいてゐて、この低い家はどこまでもつづくやうにみえ、自分はどこに行つてゐるのかしばらくは見當もつかなかつたが、まもなく低地のひろがりは次第に狹まり、小さな石鹼工場のところまでくると、細い徑がその工場の裏で、白ちやけた雑草の生えた崖につきあたり、崖の上には樹々と屋根が一面にいま落日に眞紅に染まつてゐる小住宅街があるらしかつた。汚れた着物をきて遊んでゐる子供たちが怪しまれながら崖を傳つてその住宅街にのぼつてゆくと、そこは凸凹の多い一帯の高臺で、下の工場からの煙で黒くなつた屋根が樹々にかこまれて不規則にならび、粗末な生垣のかげに小月給取などの住宅らしいものが肩をならべてゐた。その眞ん中のあたりに來たと思ふと

き、昔の武蔵野の名残りとも思はれる高い樺の樹立がそびえてゐて、いまは秋の落日のなかに、黄色に染まつた空から黄金色の枯葉を雨のふるやうに落してゐた。そのかげに、屋根に落葉をためた小さな古びた二階家が一かたまりになつて崖に寄りそひ、そこだけはひどくしづかなおもむきがあつた。

崖にひとかたまり白い花の群がみえたので近づいてみると、それは咲きほほけて色が褪せかけた野菊の花であつたが、その時、私は一軒の家の格子戸に「かしま」と細々とした女の手でかかれた半紙が半ばとれかけて風にひらめいてゐるのを見た。中に入つてゆくと三十を少しすぎた、色の白い女が出てきて上品に挨拶した。彼女は、私の田舎の母が昔のころ着てゐたやうな、澁く蒼い底光りをもつた地味な絹物をきてゐたが、この蒼光りする着物につつまれた彼女の白い圓い顔、観音眉、黒い切長の眼、埴輪のやうに切れ込んだ口、また、靜脈が一々浮びあがつてゐるやうな白い手などの全體が、私には古い陶器の光澤、硬さ、色、冷やかさ、を思はせた。部屋をみせてほしいといふと、どこかの地方訛ののこつたなめらかな言葉で、顔を赤らめながら、すこし警戒するやうに、私の學校や今迄ゐたところや郷里を訊ねたのだつたが、學校とはあまりにかけはなれたこんなところに部屋を探しにきたことだけは少し不思議に思つたらしいが、ただ靜かな生活がしたいからだと説明すると、そのほかに警戒することも無いと思つたのだらう、古風な屏風のある玄關から、粗末な木材のきしむ狭い階段を二階に案内してくれた。

二階には六疊と四疊半の二つの室があつた。南と西とに向いた六疊をかせようといふのであつた。窓からは眞向ひに葉が疎になつた樺の樹立があり、その枝の間からは、西日に染まつた一帯の傾斜地の家並が、向ふの工場地、その向ふの高臺へとつづいてゐた。西日に射こまれて、ざらざらの壁面をみせてゐる部屋の中で、私の目についたものも、この女の顔や着物に負けぬほど變つたところがあつた。小さな床には、古びた俳句の軸があつた。その草書は、私

には「すず蟲の……」までしか判じられなかつた。壁の正面には、燕尾服をきた男の半身像の寫眞がある。彼は角刈の巨漢であつて、濃い眉と、大きな吊り上つた眼と、圓く坐つた鼻と、黒々とした鬚の下の大きな口を持つた四角な顔とを眞正面から此方に向けて睨みつけ、襟には菊の造花を挿し、腕を背にまはして反りかへつてゐる。私は吹き出しさうになつたが、傍に立ちながら、私がその寫眞を見つけた表情を感じて、明るく光の中で頬を赤らめてゐる女を見ると我慢して眼をそらした。すると一方の壁には、氣持のいい素描の版畫があつた。疎な林のかげの草地のうへに、向ひあつてゆるやかに身を横たへてゐる男と女との素描である。ちかづいてみると「マティス」といふ署名があつた。巨漢の寫眞は、この抒情的な繪を、西日に火照つた室の中で睨みつけてゐるのだ。さらに眼をそらして、襖のあひだから隣の室をみると、この家の子供のものらしい机があり、小學校の教科書がのつてゐたが、その前には、濃厚な色刷りの、基督の繪が二枚ある。一つは、しろじろとした裸身に釘を打たれて血を眞紅に流してゐる圖であり、一つは跪いて天に祈つてゐる圖である。

しばらくして私は細かい條件などきくこともなしに、いつのまにか、この室を借りる約束をしてしまつてゐる自分に氣がついた。もう日は向ふの岡に沈んでゐて、室は暗くなり、マティスも巨漢もキリストも俳句も體氣になり、冷たい陶器の肌のやうな女の顔ばかりが蒼白く光つてゐた。これはどういふことになるだらう、と思ひながら、前金を置くといふので家を出た。室でみたさまじまのもの、女、着物、すべて、好奇心を惹いたことはほんたうであつたが、私はそれをどういふ風に結びつけて、その家をどういふ風に考へていにかわからなかつた。

その家に移ることにきめたと伯父に話すと、彼はその家が學校からは今の倍も遠くなるといふことを言つて苦笑したが、もはや勸告

しても何にもならぬと思つたのであらうし、また伯父の子供たちに自堕落な風習を感染させる私を、かねて遠ざけようと思つてゐたのもあらうか、止めようとしなかつた。後からこの移轉をきいた友達も、何かの魂膽があつてさうしたのだらうと推測するほどのこともなく、ただ、ぼんやりとした精神状態の男にありがちな氣粉れだらうといふやうに解釋したらしかつた。

移ることにした日の朝おきてみると、冷たい霽雨がしきりに降つてゐたが、その雨は時には氷片をまじへた霰になつたり、強い風を伴つたりして、たうとう三日間降りつづいてしまつた。そのあひだに、あの家について感じた私の少しばかりの好奇心もさめてしまひ、マティスもキリストも女も寫眞もはや強い印象をあたへるのでもなく、しだいに引越しが億劫になつて行つたのだつた。晴れた四日目に身を起して荷物をまとめたのは、ただ、約束をしたからそれを實行するといふ負擔を感じてゐたからであつた。

荷車がついたと思ふところに、坂路をその家に向つて登つてゆくと、泥濘の深いその路からみた一郭の風景は、あのときと別のものではなかつたか、と思ふほど變つてゐた。まだ晴れ切らず、時々、雪を含んだ灰色の雲が低く垂れてきてあたりを蔽ひ、樺の樹立はこの一雨に黄金の葉をすつかり落してしまつて、骨張つた枯枝ばかりを空にひろげてゐた。濡れた屋根の群は黒ずんでうづくまつてゐた。崖路の菊は雨に腐つてしまつてゐた。私を迎へてくれた女の顔は一層白く蒼ざめ、あの西日の中で火照つてゐた陶器の光澤ではなく、暗い冬の夕方にあたり空気よりもつと冷たくなつて光を底に凍らせてしまつた陶器の感覺があり、その言葉も、凜として刺すやうな響きがあつた。室には、子供の机も、燕尾服の寫眞も剥ぎとられ、ただマティスの繪だけが残つてゐた。魔術のやうに變つてしまつた「冬の家」に私は入つてきたのである。マティスの繪をみたときそのことはつきり感じられた。四日前にみたときは、その繪の疎な林は、その枝と幹の線條のあひだに何かやはらかに光る若芽

がついてゐると感じられ、樹々の奥には小鳥の聲がきこえ、流れか泉かのさざめきさへあり、男と女とは青々としげつてところどころに花の咲いた草上に、抱擁のあとのつかれにでも身をよこたへながら、涼しい眼で互を愛のある心をこめてながめあひ、汗ばんだ肌を流れか泉かで水を浴びてあらはうとしてゐるやうにみえたのだつた。實際彼等の足元に粗略に描かれた草の線は、萌え立つ綠色、マーガレットの白、罌粟の紅さへ心の眼に沁むほど感じられたものだ。あたかな風と、濃い空氣の匂ひとが畫面から流れてきてゐた。しかし、今は、林はただ裸木の骨組だけしかみえず、その疎な樹間からは冷たい風が吹き、地は凍てつき、枯草のうへの男と女とは、何か取りかへしもつかぬ過去をたがひに歎きあひ恨みあつて、身をすくめて裸へをこらへてゐるやうにしかみえないのだ。

女は茶をすすめながら、私について簡単に身分や經歷をきいた。今度は私がこの霧島家のことをきく番であつたらうが、私は世馴れた風にこんな女にききただす仕方を知らなかつた。壁面に白い跡をのこして消え去つた燕尾服の男は、この家の主人、門札に出てゐる霧島嘉門であるかどうか、一體この家は何をしてくらしてゐるのか——さうしたことをちよつと訊ねてはみたかつたが、結局、いそいできくこともないと思つてやめた。女は、私の心を讀んだのであらうか。平坦な口調でいつた。

「あのをかしな寫眞が主人でございます。今日はもう直ぐ勤めからかへつてまゐりますが、變り者ですからいろいろ失禮があるかわかりませんが、許して下さいますやうに。ほかに小學校三年の輝雄といふ男の子と、一年の咲子といふ女の子とございますが、上の方は惡戯で、下の方は泣いてばかり居ります。これも許して下さいました。私たちは三年ほど前に、中國のあるところからこちらにまゐりました。」

さういつて、女は降りて行かうとしたが、襖のところで立ちどまつて、「あなたは基督教ではございませんか。」とたづねた。

「いいえ。」

「それでは基督教はお嫌ひではないでせうか。」

「好きでも嫌ひでもありません。」私は冷淡にこたへた。

彼女は「私どもはクリスチャンです。」と、驚くほど強くきつぱりといつて降りて行つた。

ひとりて荷を解いてゐるとき、子供たちが歸つてきた音がした、と思ふと、讚美歌の聲がきこえてきた。

きよき岸邊に やがてつきて

あまつみに つひにのぼらん

その中に男の子の甲高い聲と、弱々しい女の子の聲とがききわけられたが、一番高くひびき、何か狂熱を帯びてゐるやうにひびくのは母の聲であつた。飛んだところにきたものだ、これよりは伯父の家の輕薄な陽氣さの方がよかつたかも知れぬ、と思つてゐるとき、母につれられて、挨拶しに、子供たちが上つてきた。兄も妹も母に似て色が白く、兄は神經質な眼と、濃い眉をもち、妹は長い睫毛のあるかよい顔をしてゐたが、母の後から頭をさげると、恥づかしさうに降りて行つた。降りかけに、兄は眉をびくびくとさせたとと思ふと、いきなり妹の髪の毛を引張つた。妹はひいひいと泣き出した。私は急いで従妹が饒別にくれた菓子菓子を妹にやつてその頭を撫でたが、その皮膚は泡にさはるやうにやはらかく、融けてしまひさうに私の手には感じられた。私をおそれるおそれる見上げた茶色の眼からはとてもなく涙が流れ出すのであつた。

階下からは夕餉の肉を煮る匂ひが流れ、主婦の讚美歌と咲子の泣きどゑとが、それから、高く低くつづく夕方の街の物音と釋の梢に鳴る風の音とに交つてきこえてきた。私は疲れて荷物の片付けも中途でやめて、蒲團の山のうへに仰向きに倒れて眼をこぢ、その匂ひをかき物音をききながら、遠いところにひとり旅にでもきたやうな氣持になつてゐた。すると階段が今度はみしみしと大きく鳴りひびいたので、眼をひらいて振りむくと、暗い踊場のところに、ま

づ、いが栗坊主の巨大な頭がみえ、支那人が『水滸傳』の豪傑あたりで臥龍と形容した太い眉毛がみえ、それから、吊り上つてやや充血した眼玉、剃りあとの青い頬、大きな口、四角な顎があらはれて、びたりとこちらをみた。あの寫眞の主だな、と思ふうちに、いかり肩、厚い胸部、ふくれた腹、大きな腰、大きな脚部が、浪底からあらはれる海坊主のやうに階段から浮かびあがり、その六尺に近い身體が敷居の前に直立したが、急に私の前に坐り、私が居すまひを直すひまもなく、耳に鳴りひびく聲を發した。

「わたくしは霧島嘉門といふものです。内閣調査局に勤務して居ります。」

私は手短かに自分のことを紹介した。

「わたくしは留守勝ちですから、よろしく願ひます。留守勝ちですから。」と念を入れるやうに私を見据ゑた。

その體は恐しいほどいかめしく、聲は大きかつたが、しばらくするうちに、それには何の邪氣もない單純さがあるだけのことで、暴暴しくみえる形相すが、威張つた子供の顔のやうに他愛ないものでないかと、思ふほどの餘裕が出来たので、私は持つてきた菓子をすすめ、煙草をすすめた。

「わたくしはクリスチャンですから、煙草はやりません。」今度のその聲の大きさは、やや落ちつきを取戻しかけてゐた私もまた驚いてしまつた。それは家中を震動させたのである。とみると、彼の手はそのときにもう一本の煙草を擲んで、喘ぐやうに低い聲で「一本いいただきます。」といつた。

「實は家内にきこえるやうにああいつたのです。」彼が最初の煙を厚い胸の奥深く吸ひこむときに細めた眼の色、ぼっ！と吐き出したときに開いた眼の輝きをみてゐると、これはただの煙草でなく、世にも珍しい麻酔藥のやうなものでもあるやうだつた。

「わたくしの一家は落ちぶれてしまつたものです。今はまったく窮地に陥つて、他人に間貸しまですることになつてしまひました。ど